

老研究者の最後の務め

原 不二夫

1. 日本マレーシア研究会は、水島司先生らが中心になって結成されて基礎を固められ、立本成文先生と故堀井健三先生が会長として発展に尽くされ、山本博之さんを長とする運営委員会が実働部隊として会の拡充と研究の向上に貢献されて来られた結果、今日の隆盛を見るに至ったものである。こうした功労者の先生方が、会の運営が軌道に乗ったので別の人たちに任せてもさほど混乱は起きまいと多くが一斉に退任され、思ってもみなかった私が会長をお受けする羽目になってしまった。私は立本先生よりわずか2、3歳「年少」に過ぎず、思考能力、活動能力、記憶力などを勘案すると、「年長」の立本先生に比してむしろ遜色が目立つ。従って、私の会長職は1期2年が限界である。次の世代の研究を本当の意味で指導できる研究者への中継ぎ役としてこの任を仰せつかったと理解している。

この人事だけを見れば、私自身も、会員の皆さん総ても、不安でたまらないだろうけれども、鈴木陽一委員長を中心とする運営委員の皆さんはいずれも会の内情・運営に精通しておられるし、金子芳樹さん、杉本均さん、永田淳嗣さんや信田敏宏さんは留まって下さったので、その点では内外から安心して見守っていただけれると思う。

2. とは申せ、こういう重要な任務を与えられたからには、今期2年間のマレーシア研究会について何らかの考えを開陳しなければお叱りを受けると思う。

先に会報で、定説を打ち破ることに努力を傾けて欲しい、私にはその能力がないので若い人にその希望を託す、と書いたもので、ここではそれは繰り返さない。

会員が増え、研究領域が広まり深まっていることは喜ばしい限りである。これまで誰も触れたことのない資・史料を駆使したり、自ら調査を行なったりして、数多くの優れた研究が世に問われるようになった。私がマレーシア研究に首を突っ込み始めた頃に比べれば、実に隔世の感がある。格段の進化である。ただ、こうした研究を研究会で発表する場合、余りにも専門化、特殊化が進んだために、聞く者にはその意義がよく分らない、極論すれば興味も湧かない、といった事態が起きかねない(これは、マレーシア研究会に限らない)。それを防ぐ手立ても考えて欲しい。その研究がマレーシア社会全体から見てどのような位置づけを与えられるのか、とりあえず、まずその辺を丁寧に提示して欲しいと思う。

もう一つ。日本には近年、かなりの数のマレーシア人研究者が長期滞在している。こうした人たちにも、研究会で発表してもらい、出来れば会員になってもらって交流を深める

ために、研究会での英語（将来、場合によってはマレー語も）での発表の場をもう少し増やせまいか、ということである。これは語学の才のない私が言うのはいかにも奇妙だけれども、マレーシアの研究者から言われてなるほどと思ったので敢えて記す次第である。

最後に、もう辟易している向きもありそうだけれど、私は日本語亡者なので、在任中会員の皆さんの書いた日本語にはずっと目を光らせるつもりでいる。実は私の役割はそんなところにしかないかも知れない。覚悟していただきたい。

2006 年度 JAMS 研究大会・予報

日程：2006 年 12 月 2 日（土）、3 日（日）

会場：立教大学新座キャンパス（東武東上線志木駅または JR 武蔵野線新座駅利用）

内容：個別研究発表／大会委員企画／自由企画／会員総会など（予定）

個別研究発表の発表希望者は、1.発表題目、2.要旨（600 字程度）を明記のうえ、E-mail もしくは郵便で 8 月 31 日までに大会委員までご応募ください。

大会委員企画の他に、会員のみなさまからの自由企画（パネル発表、ラウンドテーブル、書評セッションなど）のご希望があれば、大会委員までお寄せください。自由企画をご希望の方は、1.企画の題目、2.趣旨（600 字程度）、3.発表・コメントなどの予定者名を明記のうえ、E-mail もしくは郵便で 8 月 31 日までに大会委員までご応募ください。応募企画につきましては、大会委員・開催校・運営委員会で検討のうえ、9 月下旬（予定）までに採否をお知らせします。

大会委員：舛谷 鋭 (MASUTANI, Satoshi)

立教大学 観光学部 交流文化学科